

知性も経験も、輝きだすのは今

[エクラ]

éclat

May 2008
http://eclat.shueisha.co.jp
780yen

5

極上通販
エクラプレミア

別冊付録
今度の旅行は、何着てい
華と品ある
「旅スタイル」

「タバサ」デザイナー
奥山幸子の世界
人気料理店の美味
@home

大特集
心もカラダも
深呼吸する旅へ

美ら島
「沖縄」が
呼んでる！

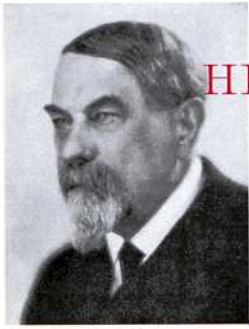
Fashion
決め手はひざ丈！
「エアリースカート」

エクラ世代の
エブリディ「チュニ
痛くない、疲れなし
「優秀サンダル」

Beauty
もっともっと！「化粧
目ヂカラUP！
大人の「まつげ」講

愛でる、育てる、美しくなる！
やっぱり
「バラ」が
好き！

吉谷桂子さんと訪ねる
「手仕事」、新しい風。
本当においしい
「沖縄ごはん」はここにある
大人の宿選びは
「スモール&ラグジュアリー」で



HENRI LE SIDANER

アンリ・ル・シダネール
(1862~1939)
印象派の画家として活躍。1901年よりジェルプロワに住み、バラの絵を好んで描いた。ジェルプロワをバラの村とした立役者。
Bridgeman/PPS



(上) The House with Roses (1936) Bridgeman/PPS
まさに、外壁をバラの花で飾った家。
ル・シダネールが愛した光景なのだろう
(左下) 離れ屋 (Le pavillon/1932)
急傾斜の屋根の煙突が、ジェルプロワの建物を思い起こさせる。ひろしま美術館蔵



(上) アンリ・ル・シダネールの住んだ家。
現在は孫が週末を過ごす家として使っている
(左) ル・シダネールのアトリエ。
当時のまま保存されている。4/1から公開予定
(公開期間は4~10月)、要予約
☎03・44・46・32・20 (団体15~60名)
☎03・44・82・36・63 (個人)

村中の建物の外壁を飾る花はすべてバラに決めよう

アンリ・ル・シダネール

ジェルプロワに居を構えて以来、精力的に花の絵、それもバラの絵を描いたル・シダネール。今も当時の面影がしのばれて。

住人の心意気が育て守る、バラの町並み

ジェルプロワはバラが咲くころ、最高の時期を迎える。中世から続く町並み。各家々の風雨にさらされてすっかり味の出た外壁に沿って色とりどりのバラが咲く。その見事なことといったら感動的だ。

ジェルプロワは本当に小さな村。住人は季節によって多少の変動があるけれど、平均して100人程度と少ない。村をぐるり歩いて一周しても15分くらいで終わってしまうほどの広さしかない。

家の外壁にはバラの花しか咲いていない、と人という、みんな驚く。「個」が確立しているフランスで、住人の誰しもがバラしか植えず、これに異議を申し立てる人もいないのは、考えてみれば不思議といつてもいい。しかし村中をバラで満たし道行く人の目を楽しませる美しい光景に住人は誇りをもっているのだろう。

中世からずっと変わらない村のたたずまい、そこに咲いているバラの花。年月を経ずには得られない、かけがえない価値のある美しさだ。

しかし、それを維持するのはけっこう不便なこともつきまとうのである。例えば、村には昔から一軒のパン屋も、食料店も、ガソリンスタンドもなく、鉄道も公共のバスも走っていない。これで人々は毎日暮らしているのだ。生活に必要なものはすべて車を走らせて隣町まで行って入手しなければならぬ。こんな不便を押しても、村の変わらぬ魅力の

保存を選ぶ住人の熱い思いは厚い。ジェルプロワを語るうえで欠かせないのがアンリ・ル・シダネールだ。

印象派の時代に活躍した画家で、モネやシスレーらと同時代の人である。ル・シダネールはフランス各地に住んだあと、ジェルプロワに居を構えた。1901年のことであった。

ジェルプロワのある一帯は中世のころ、常に宗教戦争が繰り返げられていて、ジェルプロワは当時の要塞都市のひとつだったところである。今でも正式には村ではなく、*commune* (町、都市)で、フランスで一番小さな都市なのだ。

20世紀の初めにル・シダネールが訪れたときには、見捨てられた姿でそのまま眠りについていた村であった。しかし、ル・シダネールは直感した。修復すれば素晴らしい村になると。そして自分の求めている環境がここにはそろっていると。

1901年に家を買った、修復し、そして母屋と庭の間にバヴィヨン(東屋)を建て、アトリエとした。同時にイタリア式庭園も造らせた。敷地は高台にあるため、段差のある庭がリズムをつくっている。

そして村中をバラで埋めつくそうと提案。ル・シダネールの絵を見るとよく理解できるのだが、彼の絵はいつもバラが咲き誇っている。

ロマンチックで格調高く、人を優しく包み込むバラ。村中がバラで包まれるなんて、なんとすばらしいアイデアなのだろう。フランスならではのアル・ドゥ・ヴィーヴル(生活の中の美)が、今もここにある。